

装飾と表現(II)

— 絵画表現の外側から —

関 崎 哲

要 約

ある空間を「表現された空間」としてインスタレーションする場合、「空間全体としての表現」として提示するための条件が必要である。その条件とは、作品とその作品が置かれる空間との間に質の違う時間の流れが存在する、と言うものである。そしてこの条件は、庭園や建築と言った、いわゆる芸術表現とは異なる空間構成の分野や、現代の新しい芸術表現の手法によって表現された空間の中にも共通に見られるものである。しかし、具体的な表現空間としての現れ方は、各々の分野での装飾というものに対する解釈の違いから異なったものになっている。

このような空間表現に対しての、装飾的アプローチの方法と表現空間そのものを捉え直し、なんらかの形で、絵画的表現をその表現要素とするインスタレーションに生かすことが、今後の絵画表現を考えて行く上で、必要かつ重要なことである。

キーワード：インスタレーション、装飾性、空間表現

はじめに

これまで、装飾と表現という研究テーマのもと、インスタレーションの手法を中心に研究制作を行ってきた。その一連の活動のまとめとして「装飾と表現—作品と場の関係—」^{注1}を発表するとともに、その成果を一步深める形で、書院建築内でのインスタレーション^{注2}を実施した。その後、98年から99年にかけて、文化庁派遣芸術家在外研修員として英国ロンドン市で研修する機会を得、「作品と表現空間の研究」というテーマで調査研究・制作を行った。本研究は、書院建築内での作品発表の経験と、英国での調査研究の結果を基に、絵画以外の手法による表現と表現空間との関係を「装飾」という観点から考察を行ったものである。

1. 空間を表現するための手法

(1) 「表現された空間」のための条件

空間の特質を表現に結び付けたインスタレーションの仕事を考えていこうとする場合、インスタレーションされる個々の作品が平面であろうと立体であろうと、その作品自体と作品の設置方法に、いかにして効果的な「空間の特質を表現に結び付けるための手法」を採るか、ということが重要な

注1 「装飾と表現—作品と場の関係—」岡山県立大学短期大学部研究紀要 第3巻(1996)

注2 「関崎哲・Parallel Garden」個展 岡山県高梁市 頼久寺書院(1998)岡山県芸術祭参加

ことである。そしてこの場合、装飾という観点が、表現する者に、「空間の特質を表現に結び付けるための手法」の具体的なヒントを与えてくれるものとなる。私自身、これまで幾つかの建築空間の中で作品の発表を行って来たが、その都度、装飾という観点に基づき、設置した作品が個々に表現内容を主張することをできるだけ押さえつつ、空間全体が統一された一つの作品として現れてくるような表現手法を思考し試みてきた。

しかしながら、このような手法を用いて空間をインスタレーションし、「統一された空間」から「表現された空間」に移行させようとする場合、装飾という観点がかえって表現の障害となることも事実である。装飾的な要素を利用しつつも、単なる空間のための装飾に留まらない「芸術作品としての空間」を提示するためには、この装飾的な要素をあくまで作品自体の表現意図を補強するものとして用いて、作品が置かれる空間の特質を生かした「空間全体としての表現」として提示するための条件が必要になってくる。

空間の中で表現するものとして「インスタレーション」と呼ばれる手法は、その作品の設置自体が仮設を前提としているものである。恒久的に存在する建築や自然環境などに対する、この仮設という状態そのものが、このインスタレーションを芸術作品として認識させる一つの要素になっている。一方、同じように空間の中で表現するものとして捉えられるパブリックアートでは、様々な日常が交錯し変化するパブリックスペースという空間の中に、恒久的に置かれることが、これを芸術作品として認識させる要素になっている。

この二つの対比により明らかになることは、作品とその作品が置かれる空間との間に、時間の流れの質の違いが存在しているということではないだろうか。そして、その「作品と空間との間に、時間の流れの質の違いが存在している」ということこそが、空間全体を「表現された空間」つまり、芸術作品として認識させる条件になっていると考えることができる。

(2) 空間を表現するための様々な手法

空間を表現するための手法は、芸術表現の側面から考えていこうとすると、インスタレーションやパブリックアートといったものに自ずと限られてしまう。しかし、純粋に「装飾する」といった観点や、先に述べた、表現された空間の条件（作品と空間との間に、時間の流れの質の違いが存在していること）という観点から考えると、庭園や建築という芸術表現の外にあるものや、純粋な装飾性を突き詰めて行った末に現れたある種の装飾美術の中に、様々な空間を表現するための手法が存在することに気がつく。

庭園は、幾何学的な構成を採る西洋庭園と日本庭園のように自然を模倣することで生まれてくる様式によって構成されるというものの違いこそあるが、いずれも人為的表現要素で空間を構成することにより、庭園外の空間と区切られ、装飾性を備えた独自の時間性を獲得している。

建築は、その建築が造られた時代や地域・風土によって、そこに施される装飾の様式も含め建造物として現れてくる具体的な形が異なる。しかしそこには、基本的な建築の性格により共通した建

築自体によって明確に区切られた外空間と内空間が存在し、各々独自の時間性を認めることができる。

装飾美術は、装身具や印刷物、また建築内部の装飾に至るまで、その主体はあくまで装飾が施されるもの自体にあることは明確である。しかし、その装飾される主体が装飾するための要素である文様によって充填された瞬間から、イメージの中で、装飾そのものが表現として独自の空間を形成し、あたかも絵画のような芸術作品として認識されるに至る。様式化された装飾文様で埋め尽くされたその空間は、ここでも他の表現手法と同じように独自の時間性を獲得している。

この空間を表現する様々な手法のうち、次章では、私自身が直接関わった幾つかのものについて具体的な検証を試みてみたい。

2. 絵画表現以外の空間表現の手法

(1) 庭園の空間表現

1.の(2)でも触れたように、一概に庭園と言っても、幾何学的な植栽の配置による西洋庭園や自然自体を模倣しながら再構成する日本庭園など様々なものがある。ここでは、私自身が作品展示の際にかかわった「枯山水」の庭園について述べてみたい。

98年に行った頼久寺書院（岡山県高梁市）でのインスタレーションでは、書院が面している庭園と対峙する形で作品の設置を行った。（図1・2）この庭園は、小堀遠州により江戸時代前期に作庭されたと伝えられるもので、大胆な椿の大刈り込みを中心に、鶴・亀に見立てて石組みを立てたものである。庭園の背後には借景として周囲の木立や山が取り込まれ、手前には海をイメージさせる櫛目を引いた白砂が広がっている。このような庭園の場合、「表現された空間」の要素として挙げられるのが、「借景」と「見立て」である。借景により、実際には庭園として区切られた空間が、イメージの中で外空間に向けて広がりを持つことになる。そして刈り込まれた植栽が波に、立てられた石が鶴や亀といった具体的なものに見立てられることによって、一つの表現意図に沿った空間と

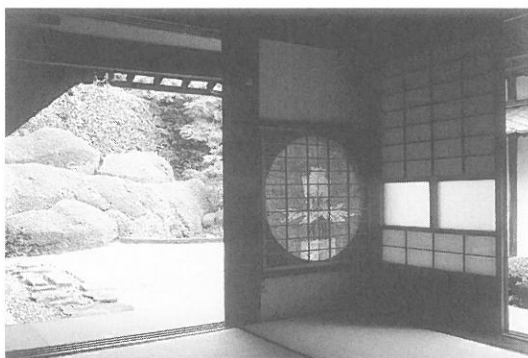


図1. 個展「Parallel Garden」1998 頼久寺書院
（書院内より庭園を臨む）



図2. 同；書院内のインスタレーション

して提示されることになる。庭園は、このような借景と見立てといった様式化された装飾的表現要素により、外空間を取り込みながらも、一日の光の変化、天候や、季節の流れといった庭園の周囲の時間と、作庭者の表現意図によって表現された庭園独自の時間との質の違いを際立たせ、空間の表現として成立するのである。

ここで絵画表現と異なる点として注目しなくてはならないのが、こうした庭園における表現意図の、見る者に対する柔軟性である。刈り込まれた植栽は、言うまでもなく植物という成長し形を変えるものであり、立てられた石は、人間の手による加工の痕跡のない自然石である。このような自然物による見立てであるが故に、たとえ刈り込む、あるいは立てるといった人為的な活動を経ようとも、見る者に対して必要以上のイメージの限定を強いることはない。また借景された庭園の外の風景は、一日の光・天候の変化、季節の流れに応じて、作庭者の表現意図とは無関係に変化し、その意志の届かぬところで空間の構成要素となる。このように、用いられた素材の特徴と、純粋な自然環境の表現への取込みが、庭園における表現意図の、見る者に対する柔軟性というものを形づくっていると考えられる。

(2) 建築の空間表現

最初に建築の空間表現について興味を持ったのは、96年に成羽美術館（岡山県成羽町）において行ったインスタレーション（図3）の際である。建築家、安藤忠雄氏の設計によるこの美術館の空間は、ガラスと打ち放しのコンクリートというシンプルな建築の構成要素と、建築の周囲に造られた遊水地が呼応し、造られた外界と建築内の空間が独特の統一感を持つものであった。しかし、この時の興味は、あくまでも自分の作品との対比する観点からの興味であり、建築それ自体の空間表現についての興味とは異なるものであった。

建築それ自体の空間表現への興味と思考が生まれたのは、98年から99年にかけて、文化庁派遣芸術家在外研修員として英国ロンドン市で研修した際に訪れた、英国建築家、デビッド・チップパーフィールド（David Chipperfield）氏による教会建築、ファーストチャーチ・オブ・キリスト、サイエンティスト（First Church of Christ, Scientist）のプロジェクトを見た時である。この40年代に建てられた教会でのプロジェクトは、チップパーフィールド氏が、既成の建築物の外装の一部と内装を手掛けたもので、「周囲の環境を生かしつつ、斬新な空間を創り出す」とでも言うこの建築家特有のデザイン意図が見事に表現されたものである。（図4・5・6）

このプロジェクトには、クライアントである教会側の主張を十分盛り込みながらも、特定の宗教（宗派）色に片寄ることのない、誰にでも開かれた親密さと普遍的な荘厳さを合わせ持つ空間を造り出すための、様々な工夫が施されている。教会の外観自体はほとんど建築当初のままで、時間の流れの厚みを感じさせるものである。しかし、中に入るとシンプルな素材と色彩による空間に驚く。その外観からは想像のできない新鮮な空間に、違う建物の中に入り込んだような錯覚に陥るのである。この驚きが、訪れた者の心の中に、俗と聖を分ける明らかな一線を引き、荘厳で宗教的な気分



図3. 個展「AQUA REGIA」1996 成羽美術館



図4. First Church of Christ, Scientist
(Sheen Road, Richmond) 教会外観



図5. 同；教会内観（入り口より祭壇を臨む）

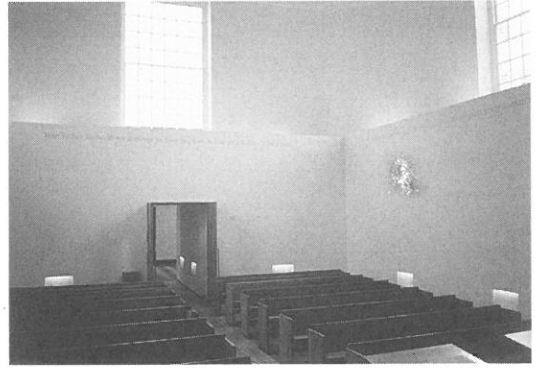


図6. 同；教会内観（祭壇より入り口を臨む）

を生じさせるものとなる。ところが、しばらくその空間に佇むと、内壁の上から見える窓越しの風景が、シンプルな内装と響き合い、こんどは、親密な安心感が訪れた者の心の中に沸き上って来るのである。

この建築で受けるこうした印象は、建築の外観と内空間のとの間にある、ある種の感覚のギャップという点で、既存の建築空間に作品を設置しそこに新しい表現空間を創出しようとするインスタレーションの手法に非常に近いものとして理解することができる。しかし、主張のはっきりした教会というクライアントの要望に対して、この建築家が採った、周囲の自然環境をある部分では遮断し、またある部分では積極的に空間内に取込むという、明確な表現手法は、建築特有のものと言えるのではないだろうか。

(3) 現代の造形美術の空間表現

庭園や建築は、いわゆる芸術表現とは明らかに異なる分野であり、そうしたものの空間表現に関わる手法について考えることは、非常に新鮮で新しい視点を示すものであると考えられる。さらに

ここではそれに加えて、新しい造形美術の空間表現についても考えておきたい。何故なら、現代の造形美術の表現の中にも極めて斬新な空間表現の手法を持つものが幾つか見られるからである。

レイチェル・ホワイトリード (Rachel Whiteread) は、彫刻家として捉えられることの多いアーティストである。しかし、彼女の作品は、「物」自体を彫刻として示すという従来からの彫刻の手法ではなしに、物によって囲まれた「空間の形」を型取り、実際には存在しない空間の量を彫刻（のような固まり）として表現するという一見風変わりな手法によるものである。私が実際にその作品に接したのは、98年11月に行われた、ロンドンのアンソニー・ドフェイ・ギャラリー (Anthony d' Offay Gallery)での個展である。この時の作品は、本棚 (本棚と本棚の間に存在している空間) を形取りしたネガティブで巨大な立体によるインスタレーションで、ギャラリーの空間が、天井ぎりぎりの大きさの作品でうめ尽くされる様子は、衝撃的でさえあった。(図7)

ギャラリー空間に置かれた立体は、本来、空間として存在しているものである。量のあるものとして認識されるはずのないものが圧倒的な量感をもって展示空間の中に在ること自体、今までの(空間を形づくろうとする)芸術表現の方向性とは正反対の空間表現の手法で、これまでに無かった新しい手法であると言える。

一方、様々なイメージ操作により積極的に外空間を作品、あるいは、展示空間に取り込もうとするアーティストがいる。ハミッシュ・フルトン (Hamish Fulton) である。単純に言ってしまうと、歩くという行為そのものが彼のアートである。その行為を表現として提示するためには、他の芸術表現と同様に、表現するための空間と表現物が、欠くことのできないものであるが、彼は、独自の表現空間を造り出すために、様々なイメージ操作により、インスタレーションを行っている。98年12月に、ロンドンのアネリー・ジュダ・ファインアート (Annelly Juda Fine Art) で行われたインスタレーションでは(図8)、ギャラリーの壁や床に「どこを何日で歩いた」というようなステートメ

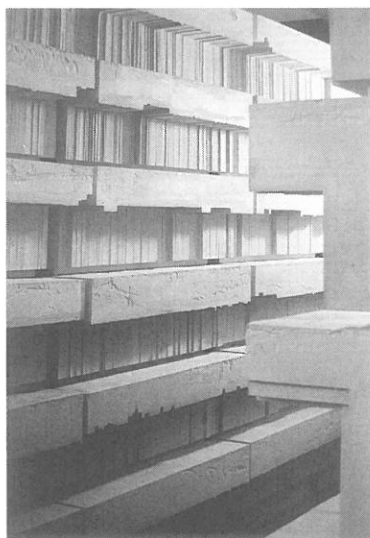


図7. レイチェル・ホワイトリード (Rachel Whiteread)
Untitled (Book Corridors) 1998, Anthony d' Offay Gallery

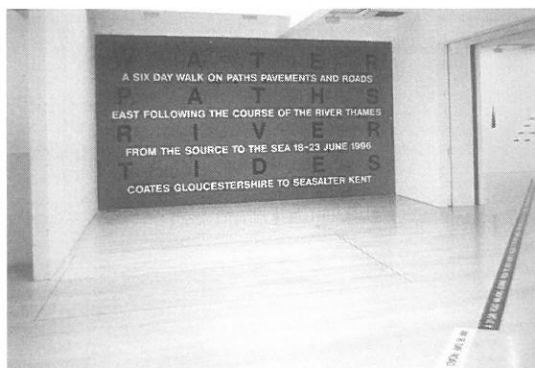


図8. ハミッシュ・フルトン (Hamish Fulton)
1998, Annelly Juda Fine Art におけるインスタレーション

ントが様々なデザインで描かれ、ドローイングと写真とが同時にインスタレーションされる。装飾的とも言える無機的な活字で描かれた距離や地面・天候の様子が、歩くという行為自体を、その言葉としての具体性とは裏腹に、見る者各々の経験に基づく多様なイメージとして心の中に浮かび上がらせ、歩くという無意識になされる行為と、その行為を行った自然環境が、新たな価値観を持ってその展示空間に現れてくる。

彼の空間表現は、そこに用いられた表現要素が、絵画に近い平面での表現手法を採りながらも、自然物（立体）を用いた庭園における表現意図の柔軟性と共通のものを持っているという点で興味深いものである。

3. 絵画表現による空間へのアプローチ

さて、絵画である。元来、絵画は、空間を形づくる建築が存在して初めてその表現の場を得た芸術表現の手法であり、その多くはフレームによってそれ自身の表現空間を限定するところで行われる芸術表現である。自ずと絵画の中には、その絵画独自の空間と時間の流れが存在していた。私自身、絵画とはそういう物で、それ以上の物でもそれ以下の物でもなく、芸術表現としては極めて完成された様式であると考えていた。しかしながら、建築空間の魅力に引かれ、その空間の特質を自分の絵画表現の中に取り込もうとした時から、それまで自分自身でも気がつかなかった絵画表現の可能性を意識することになった。これまで、装飾と表現という研究テーマのもとに行ってきたインスタレーションの手法を中心とした研究制作は、絵画表現の可能性を具体的なものとして見極めるための試みであったと言ってもいいと思う。そして、幾つかのインスタレーションを試みる際に念頭にあったのが、日本の障壁画である。特に、讃岐琴平宮表書院の庭園に面した室内に配された、円山応挙の障壁画は、室内をぐるりと囲む形で山水が描かれていながら、戸外に広がる庭園とのつながりも自然に表現されており、私自身の中で、絵画表現による空間へのアプローチの方法として、一つの理想形となっている。

本論では、空間の特質を表現に結び付けるための手法として、装飾というものを考え、いわゆる絵画表現以外の手法による空間表現について考察を行ってきた。その結果、いずれの空間表現の手法を用いたとしても、作品を設置した空間全体を「表現された空間」もしくは、芸術作品として認識させる条件があり、それは、作品とその作品が置かれる空間との間の時間の流れに質の違いが存在するというものであることが解ってきた。そして、絵画的表現を主体として空間にアプローチして行こうとする場合、フレームでくくられた絵画独自の空間と時間の流れを超えて、本論で触れたような、絵画以外の手法の中に見られる、様々なアプローチの方法を何らかの形で生かし、絵画空間の中の時間の流れと、それが置かれた空間の時間の流れの質の違いを、その表現空間に存在させることが、絵画的表現を主体としたインスタレーションにとって、重要かつ必要なことであると考えられるようになった。

今日、いわゆる「ヴィジュアルアート」というと、単純にフレームでくくられた絵画のみを指す

のではなく、より現代的な芸術表現の手法である絵画的表現や彫刻的表現を作品構成の要素としたインスタレーションや、ビデオアートまで含める場合が多い。しかし、ヴィジュアルアートを構成する要素を、仮にヴィジュアルオブジェクトと呼ぶことができるとすれば、逆に、絵画もまたヴィジュアルオブジェクトと呼べる現代美術の一つの形式だと言えないことはない。一瞬にして表現内容全体が見る者に伝わり、かつその状態が継続可能な表現物としてのヴィジュアルオブジェクトの性質は、そのまま絵画のものでもあるのである。そして、本研究の結果に即して言えば、絵画を用いて表現内容の拡大を図るインスタレーションというものも、先に述べたような、空間全体を「表現された空間」として認識させる条件を備えたものであるならば、現代を反映する空間表現の手法として十分な価値を持つものと言えるのではないだろうか。

4. おわりに

今回、今まで興味を持ちながらも自分の中でバラバラに存在していた、空間を表現するための様々な表現手法を、明確に関係付けることができたことは本研究の一つの成果であり、私自身の研究制作の上で、大きな意味を持つものと思われる。

今後は、「ヴィジュアルオブジェクト」による表現という観点から、さらに現代の芸術表現としてのインスタレーションについて、研究を進めて行きたいと考えている。

本研究には、岡山県立短期大学部特別研究費の助成を賜った。また、全くの門外漢である私に対して、快く御指導下さった、

頼久寺御住職 生島裕道氏、

建築家 デビッド・チPPERフィールド氏、

アネリー・ジュダ・ファインアートのイアン・バーカー氏 (Mr. Ian Barker)

に対し、特に記して感謝申し上げる。

参考文献

- | | | | |
|---|----------------|----------------------|------|
| 「作庭記から見た造園」 | 飛田範夫 | 鹿島出版会 | 1985 |
| 「美術館からの逃走」 | 勅使河原純 | 現代企画室 | 1995 |
| 「庭園倶楽部」 | 稲次敏郎 | 学芸出版社 | 1995 |
| 「The Art of Today」 | Brandon Taylor | Everyman Art Library | 1995 |
| 「円山應舉研究」 | 佐々木丞平・正子 | 中央公論美術出版 | 1996 |
| 「Art Space and the City --public art and urban futures」 | | | |
| | Malcolm Miles | Routledge | 1997 |
| 「Public : Art: Space」 | Mel Gooding | Merrelj Holberton | 1997 |

装飾と表現（Ⅱ） — 絵画表現の外側から —

「Frontiers: Artists & Architects」		Architectural Design	1997
「装飾する魂」	鶴岡真弓	平凡社	1997

〔 2000年11月30日 受付 〕
〔 2000年12月22日 受理 〕